エロゲオンライン

雪結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エロゲオンライン

【Ｎコード】
Ｎ３４３４Ｙ

【作者名】
雪結晶

【あらすじ】
日本中を震撼させる程のニュースがネット上で発表された。それは嫁を全国のプレイヤー達で争い奪い合うエロゲオンラインが出てきたことだ。大層な名前がついてますが、エロ描写はたぶんほんの少ししか書きません。Ｒ１８のタグを付けたくなかったので、妄想力で補ってください。一人の男性プレイヤーがゲームやってるだけです。

プロローグ（前書き）

注意：下ネタ程度のエロさです。多少あってそういう行為になる一歩手前で書きません。なのでエロは妄想してください。それと専門知識は皆無に近いです。
それでもいいよと思う方は進んでください。

プロローグ

日本の世間を震撼させるニュースがネット上で報道された。特に男性を震えさせた。恐怖という意味ではないが、ある意味恐怖なのかもしれない。新しいＭＭＯがある企業から発表された。それはエロいという要素が加わった、Ｒ１８対象のオンラインゲーム――エロゲオンラインという未知なるゲーム。

対象が対象なだけに無料で誰でも遊べるわけではない。誰もが通る道がある、それはお店で商品を買わなければならない。定価は八千円ちょっとする。お金はそれほど問題じゃない、普通のテレビゲームのソフトを買うくらいだからだ。問題は、買うには定員に身分を証明できるものを提示しないと買うことができないということ。

もちろん１８歳の俺は徹夜で何日も並び、関門を難なくクリアした。親にも買ったことは知られない、フリーターで一人暮らしをしている。問題はお金だが、それは深夜のバイトと切り詰めた食費で何とかネット生活はやっていけている。

買ってきた物をインストールすると説明書でこれを入れてくださいという買った人だけしか知りえない数字や英字が出てくる。そのシリアルコードを普通にオンラインゲームのアカウントを作る時に、秘密の文字を入力する欄があるので入力するとログインできるアカウントを作成できるようになっている。

そして俺は今――ログインしようとしていた。

「すげー、楽しみ。どんなゲームなんだろう」

ログインしますかボタンをダブルクリックするとページが変わり、俺がつけたペンネーム名でようこそと画面に出てきた。興奮して、とりあえず小便を済ませにトイレへ。

落ち着きを取り戻すと思ったが、胸がドキドキしっぱなしだった。小さな洗面台の鏡の前に立ち、顔を水で濡らす。部屋に戻って油圧式の椅子に座りる。

「よし、行っちゃうぞ。マジで行くよ、いいよね。　旅に出発しちゃうよ」
説明も読まずにスタートボタンをダブルクリックすると新たな窓がフルスクリーンで出現して鮮やかだった画面は黒色の画面に変わった。数秒待つと『エロゲオンライン』という名前が出てきてプレイヤーが操作する各種族キャラクターの基本姿をした絵柄が出現した。
「うほぉぉぉぉぉお」
俺はそれだけで自分でも気持ち悪いと思えるほどテンションが上がった。
『はじめる』という文字を選択してキャラクター選択画面に移行する。キャラクターには各種属がいて【剣士】【魔法】【弓矢】【拳法】という基本があった。レベルが上がる内にそれらも上位種に変わることができる。これはニュースで観た。ちなみに性別は男しかない。男性をターゲットにしているからだ。
「どれがいいのかな。説明書を読んでおけば良かった。ここはやはり素人でも簡単そうな剣士が無難か。……まぁいいかこれで」
考えて結局は面白みも何にもない選択をした。昔からそうだ、俺は面白みがない男。
種属を選ぶと、次は身長や顔、声を身体に関わる項目を選ぶ。自分好みに選んでいく、髪は黒で顔は中性的、身長は小さい方で、声は少年声その他いろいろ。選び終わると完了という文字をダブルクリックする。キャラクターは命が生まれたように動き出した。それと同時に音楽が流れる。
「いよいよ、全国の猛者達と嫁をめぐる戦いが始まるのか。未だ見ぬ嫁よ、待ってろよ！」

第1話　チュートリアル

プレイ画面に行く前にムービーが挟まれていた。
国王が移民を受け入れ、移民してきた人間によって裏切りにあい、魔族達に王国にいる若い女性や王様の娘が攫われてしまい、王様や国民は困ってしまう。女性達を助けるために男たちを集めて、魔族と戦争をしていくというメインストーリーのようだ。
ムービーが終わるとプレイヤーが作ったキャラクター、クロノが王国の中心地に立っていた。
「ここから動かせるのか。まずはチュートリアルだよな」
プレイヤーの男が話した言葉をクロノが喋る。
音声認識入力ツールを使っているため、キーボードで文字を打たなくても声を出したら入力される。それをクロノは喋っている。クロノの上に吹き出しが出てきて、文字が出てくる。
キーボードとマウスでクロノを動かしていく。街を見渡すと、掲示板のすぐ近くにお姉さんがいた。若さが足りなかったのか攫われなかった者だ。というのは冗談で案内役の設定キャラだ。髪はお団子で服の胸元はざっくり開いて胸の谷間がはみ出ている。唾を呑んだ。
「この人が案内役か。エロいな」
クロノがお姉さんの近くまでいくと、空中に窓が開き、それを見ると【話す】という文字が書かれていた。クロノは【話す】を指でタッチするとお姉さんは声を出して話だした。
『おはよう、クロノ。国の商人がクエストを依頼しているわ。場所は商人街の入り口にいるから、そこで戦いの基本を学びなさい。あっ、クエストの依頼を探す用事がある時は、私、エンジュに話かけなさいね』
妖艶な声で十二分に魅力がある女性だ。しかも命令口調ときたもんだ。実に良い。

これで話は終わりかと思ったが、目の前の空間に窓が勝手に出現して選択肢が出てきた。一つは《行かないよ。それよりデートしない？》、もう一つは《解った。行ってくる》だった。クロノは、というよりプレイヤーは迷わず一つめの選択肢を選ぶ。

「行かないよ。それよりデートしない？」クロノは手をぶんぶん振りながら、少年声でデートに誘った。

『ごめんなさい。私は、まだ仕事があるの』とエンジュに断られる。

釣られた。デートできると思ったか、という運営の声が聞こえてきたような気がした。運営の遊び心が早くも炸裂。

もう一つの選択肢を選ぼうと再び話しかけるも、選択肢は出てこなかった。

「無理なのか。違う方にしていたらどうなってたんだろう」

もしかしたら能力が上がるかもしれない、もしかしたらイベントが発生するかもしれない、そう思うと、これからは考えて選択肢を選ばなければならないとプレイヤーは胆に銘じた。

「よし、商人街に行くか」

先程の妖艶なエンジュの周りには同様にゲームを始めている未来の猛者達が突っ立っていた。強靭な肉体のおっさんキャラや、イケメンキャラ、それぞれ種属が違うキャラ達がクロノと同じように釣られて文句を言っていた。

エンジュに教えてもらった商人街に着くと、確かに入り口におっさんが立っていた。筋肉ムキムキの体で頭は坊主、キリッとした目力がある。そして、髭のほうは立派だった。

話かけると低い声で内容を口にした。

『王国の外にある森で獰猛な動物がいるらしい。そいつらが邪魔をして素材を運ぶ運び屋が襲われている。これじゃあ、俺たち商人は困る。だからクロノ、お前に動物たちを倒してもらいたい』

如何にもチュートリアルレベルの展開になった。話は終わっても今度は、選択肢が出てこない。話を聞き終わった後、そこらへんにいた女性に話かけると選択肢が出てきた。どうやら女性だけ選択肢

が出てくるようだった。
まだ始めたばかりで《エンオ》、つまりはお金がないため、何もお店で商品を買うことができない。クロノは店に寄らずにそのまま王国の外に向かった。外へと続く門には門番が二人いた。もちろん無視。
森フィールドに行くと豚のような動物が五匹歩いていた。正確に言うと豚ではない、牙がついていて毛も長い。近くに行くとモンスターを認識して、相手もクロノに気づく。他に動物らしきものがいないので、こいつらがターゲットのようだった。
基本攻撃はクリックを押せ、と流れる。
「あっ……メニュー画面どうやって出すんだろう……。豚がこっち来るよ、どうすんのよ」
武器を装備することを忘れていたクロノは焦っていた。説明書を読んでいないのでメニューウィンドの開き方が分からない。敵の足は遅いがどんどん近付いてきてくる。仕方なく、戦うことに決め。装備なしでグーパンチした。
三ヒット。ヒットするとＨＰが浮き出して減少する。しかし、微量だった。逃げてはパンチし、回避してはパンチして何とか危機から切り抜ける。だが、失ったものがデカ過ぎた。約一時間消費。時間は掛ったものの死なずにはすんだ。
「危なかったー。メニューの出し方見た方がいいな」
雑魚を倒したことにプレイヤーが喜んで声を出したため、クロノの上に吹き出しが出現し、クロノは喋った。
五匹倒し、金を拾う。敵の方が今のクロノより、お金を持っていた。
商人街に戻っておっさんに報告する。
『おぉ！　礼を言おう。これで運び屋も恐がらずに来てくれる。ありがとう、これはお礼だ』
おっさんは嬉しそうに話し、ポケットから何かを取り出して手を差し出す。クロノはそれを受け取ると【回復薬の癒水を一つ手に入

れた】と空間に文字が流れた。
「まぁ、妥当な褒美だな」
クロノは現実で口に出して言うと怒られるレベルの発言をＮＰＣに向けて言った。反応はないため怒られはしない。
「無視されてるみたいで虚しいな」
失敗をしないためにヘルプ掲示板を見る。メニューを出すにはＭを押せと書いてあった。メニュー窓を開くとアイテム、装備欄、ステータス、技欄、友達欄、手紙ボックス、などが書いてあった。手紙ボックスにＮＥＷという文字が出ていたが、とりあえず初期装備の剣や防具を装備欄にセットする。クロノの体が光り出して、パァンと光が弾け装備が装着した。
やることをやり終えたクロノは手紙ボックスをタッチして開くとＴＯ：運営の名前がった。件名には、『ありがとうございます。感謝デーと致しましてイベントを開催致します』と書いてある。
「イベントってなんだろう。武器とかくれるのかな」
メールの内容を見ると、
「本日感謝デーと致しまして、このゲーム最大の楽しみの次に楽しみな、嫁を賭けたバトルロイヤル戦争を開催致します。しかし、誰でも参加できるわけではありません。大会に参加できる人数は１００人。早い者勝ちです。みなさまお急ぎください。場所はイベント競技場の受付にて参加できます。では、お楽しみください」
と書いてあった。
「１００人しか参加できないのか。早く行かないと」
商人街を南に行くとイベント会場につながる道があり、そこから行ける。クロノは急いでその場所に向かった。
一つ大きな建物だけのフィールドが聳え建っていた。コロッセオのようなデザインで大きさは王の城に続いてデカさをほこる。建物の中はプレイヤーでごった返している。
「受付、受付は……」
木製のカウンターの奥にスーツを着た、若いお兄さんが立ってい

た。そのキャラに話かけるとイベントの話をしだし、『受付しますか？』と訊いてきた。
その後に【はい】【いいえ】の選択肢が出現した。
「もちろん、はいだ」
選択肢が光の粒となり、空間に霧散した。
「あなたは９７番です。時間がくるまでお待ちください」
スーツ姿のお兄さんが話を終えた。どうやらギリギリで間に合ったようだ。
暇を持て余したクロノは、人ごみの中にいた一人に話かけた。
「はじままして、クロノって言います。１００人戦争ってすごいですよね」
「どうも、俺はベジタブルって言います。凄いですよね。てか、プレイヤーさんとお話したのは、初めてですよ。みんな黙ってるし。俺って、これが初めてのオンラインゲームなんです。だからどうしたらいいか分からなくって。もしよかったら、友達になりませんか？」
渋い顔をした弓矢種族のベジタブルは、話をするタイプのようだった。オンラインで話をしても大体無視されるなか、珍しいタイプだ。クロノも友達が欲しいと思っていたので丁度いい。
「友達いなかったから、俺も欲しいですね。でも、イベント終わってからにしませんか？　何か戦争するらしいですし」
「そうですね。では、終わったらここで会いましょう」
ジリリリリとフィールド中に音が響き、受付終了の合図が鳴った。道を塞いでいた鎖が取られて、扉が開放される。プレイヤーたちは扉を目指して歩いて行く。
「始まったみたいですね」
「そうですね。嫁ゲット頑張りましょう」
クロノとベジタブルも扉を通る。
建物の中のはずなのに、扉の奥には草原が広がっていた。

第2話　初イベント

現実の世界なら風や草の匂いがするのだろうが、ここはオンラインゲームのフィールドで実際には匂いや風を感じることはできない。しかし、こうだろうとは想像できる。

「すげぇ、広い。草と木と岩があるな」

クロノは立ち尽くしながら、辺りを見渡す。

モニター画面の下に説明文が出現した。

『みなさんのレベルと武器や防具などを制限させて頂きました。みなさんには、初期状態で戦って頂きます。優勝者には嫁をプレゼント。もうじき、カウントダウンが始まります』

説明文が勝手に消えて、カウントダウンが始まった。

5、4、3、2、1――開戦。

始まりと同時に、クロノの目の前にいたキャラクターが隣にいたキャラを斬りかかった。

他にも魔法を詠唱している者や、弓で矢を撃っている者、華麗なステップをして相手に近付き、殴っている者。戦争が始まった。

クロノに拳を打ち付けようとしている拳法の一人が近付いてきた。近づいた拳法を認識する。相手の名前が頭上に出てきた。漆黒のアルテネオという名前だった。

「嫁は俺のもんだぁぁぁあ」

そう宣言しながら、拳を打ち込んできた。クロノのＨＰが減少する。が、威力は強くない。

「隠れたかったのにこいつのせいで戦わなければいけなくなったぞ。うぜぇ」

戦い中でも吹き出しは出る。クロノの吹き出しを見て相手に伝わった。

「隠れようとしてた卑怯者にはさっさと退場願おうか」

「うるせぇ、バカ。戦争に卑怯も何もないんだよ。これは戦法だ。

といっても、もう出来ないけどな、お前のせいで。厨二病のお前が退場しろ。何だよ、漆黒のアルテネオって……黒歴史お疲れ様ですにもほどがあるぞ」
「お前も大概だろ。クロノってなんだよ。クロノス意識してんじゃねぇぞ」
「これは黒い服を着てたからだよ。俺はネーミングセンスないから、ただそれだけで付けただけだ」
クロノは斜めステップをして回避し、相手に剣で斬りつけた。
相手は一瞬だけ硬直した。そして、再びクロノに向かってこようとしたが、どこからか飛んできた弓矢に当り、相手はさらにＨＰを減少した。
ここは戦争であって、決闘ではない。誰から攻撃されるか判らない。クロノは追い打ちをかけるのを止めて逃げた。木の陰に隠れる。
「あいつよりは絶対に生きてやる」
プレイヤーはバカだった。折角隠れたにも関わらず、吹き出しで丸分かりに。
漆黒のアルテネオが追いかけてきた。
「バーカバーカ。声に出してんじゃねぇよ」
「クソッ……しまった」
クロノは迎え撃とうと構えたが、横からの火魔法に気づき後ろに下がった。草原に火球が落ちた。そのせいで漆黒のアルテネオに隙が生じ、クロノは駆け出して斬りかかった。
「ムカつくな、お前」
「俺もそう思ってた」
他からの攻撃御構いなしに一人に集中して攻撃を繰り返す。ＨＰはすぐにイエローゾーンになった。
「オラァァァァ」
「消えろおぉぉ」
クロノは水平に斬撃を繰り出す。が、それは虚しく空を斬る。そのモーションが終わる前に漆黒のアルテネオは拳を打ち込んでクロ

ノを地面に倒した。そのまま拳を撃ち落とされ、レッドゾーンに突入。
「これでお終いだな」
「そうはさせない」
クロノは上から下に振り下ろして斬りつけ、斜め下から斜め上に振り上げる。最後、水平に斬りつけた。見事にイエローゾーンからレッドゾーンに色が変わり、ＨＰが無くなった。
「クソォォォォ」
漆黒のアルテネオは叫びながら光となり、空に上がっていった。
「よっしゃあああ」
クロノは歓喜して、嬉しさを噛み締めていたのもつかの間、弓矢が体を貫いていきＨＰが０になった。倒れて光となり、天に昇っていった。

第3話　ワンだ魔城

人間の死体や牛の死体などが転がっている場所にクロノは、魔族相手に戦っていた。レベルも今や２０レベルに到達した所だった。メインストーリーは2章まで行き、攫われた女性と体験も済ませた。

あの初イベントに負けてしまって以来、レベル上げに勤しんでいた。嫁を手に入れたのはクロノと同じ種属【剣士】だったのが、余計に悔しくて、もう一つのイベントにも参加せずに頑張っていた。

「明日は月に一度の嫁戦争イベントの日だ。あの時とは、違う……勝つ」

「ちょい、クロノ。こっち手伝ってくれ」

ベジタブルが矢を放ちながら後退して、クロノに頼んだ。

あの日からフレンドになって二人で攻略している。ベジタブルも戦争に負けてクロノが飛ばされた直後に飛んできた。まぁクロノとは違い、初心者のベジタブルは優勝を狙えるとは思っておらず、負けてもヘラヘラ笑っていた。

「おう、今行く。ベジタブルは援護してくれ」

クロノは駆け出して縦に斬りつけ、技『爆撃斬』を繰り出す。地面に剣先が当ると爆発を起こして敵が吹っ飛んだ。

「援護いらないんじゃ……」

「ボス戦は流石に無理だから、援護頼むよ」

「おっけ、おっけ。任せなさい」

二人は金とアイテムを拾い、道を進んだ。そこには中ボス的存在の敵がうろちょろしている。大きくはないが、数が多い。二人だけで来たのが間違いだったのかもしれない。

「マジか。これを二人で倒すのか？」

「援護は任せろ」

ベジタブルが親指を上げてグーッというモーションをした。このモーションは店で買えることができる。ベジタブルはこういうのが

好きでよく集めているのだ。
「うん、援護無しね。特攻だ。回復薬もあまり使わないで戦う」
「俺、死にたくない」
「俺だって死にたくないさ。蘇生アイテム持ってないから死んだら終わりだからな」
「解った。俺は、左任せて。クロノは右頼む」
「おっけ」
クロノは駆け出して羊のような角が生えている魔族に剣を振り下ろした。敵を認識して名前が頭上に浮かび上がった。【メ～リさんの執事】という名が。
魔族なのにスーツを着ていてどこか品格とやらがある。人間と同じ二足歩行で角が生えている。そして、その風貌からはどこかイケメンのニオイがする。
斬りつけた敵は怯んでいて、二撃目をお見舞いした。他の同じ敵もクロノを認識して攻撃を仕掛けてくる。ぞろぞろ歩いてくる。速度は速い。速いと思ったら突進してきた。
「ちょっとタイム。待って待って」
クロノの声は敵には届かない。スーピー度を緩めることなく、五匹が時間差で突進してきた。一匹目をかわすことに成功して、二匹目は斬りつけ、三匹目は当った。当って怯んでしまい動けずに、四、五匹目にも当ってしまった。
しかし、回復薬の癒水を使うまでもない。倒されたクロノは受身をとり、華麗にくるりと回って立ち上がった。相手も体勢と隊形を立て直して白い手袋を引っ張りながら次の攻撃に備えている。
「ＭＰを惜しんでる場合じゃないな」
クロノは地を蹴り、『ソードゲイル』を使用した。剣に風を纏いながら水平に回転して斬りつけると技だ。クロノが使用している剣は両手剣で速度は重さで鈍くなっているが、その分攻撃力は強い。ガードをしていても崩すことができる。向かってきた直後にガードをしていた執事さんはクロノの技で崩れ、風で相手を天に上げた。

「ご主人様の所に帰ってろ」
執事さんは地面に身体を打ち付けて倒れる。立つのを待たずにクロノは両手剣を振りかざして一匹の執事のＨＰを消滅させた。周りの執事は立ち上がり、クロノを囲んだ。そして、くるくる回り走り出して執事の残像が現れた。四方八方からクロノを殴り続ける。
「ぐあぁぁぁぁ」クロノもといプレイヤーが叫んでいる。
執事タイムが終わった頃、クロノのＨＰはレッドゾーンに達していた。
ここで逃げても追いつかれて攻撃を受けて――ジ・エンドだ。なら、もう一回ソードゲイルで相手を地面に倒してから逃げるほうがいい。
クロノは敵を天に放ち地面に倒れる隙をついて後退した。
「ベジタブル、少しの間すまない！」
「ええ！？　ちょっと、俺も死にそうですけど！　てか、クロノの敵を相手してたら死んじゃう」
横で戦っていたベジタブルもＨＰがイエローゾーンに達していて、あの数の攻撃を受けたらレッドどころか０になる。
クロノは執事に認識されない距離まで逃げて癒水を二本飲み、回復をする。
「交代だ、ベジタブル」
「解った」
全回復したクロノは疾風の如くは大袈裟だが、駆け出してベジタブルとスイッチする。勢いを殺さずに『爆撃斬』をお見舞いした。執事が爆風で吹っ飛び、ベジタブルはその隙に後退した。
「俺はボスに用があるんだ。消えろよ」
「メ～！！」
執事の咆哮がフィールドに轟き、全ての執事がクロノに襲いかかる。
避けては斬りつけて、ガードしては斬りつけ、少しずつ葬っていく。数匹の執事が重い拳攻撃を同時にしてきて横や後ろに避けるこ

とができない。だが、上には道がある。クロノはジャンプして攻撃をかわした。執事は敵がいなくなったことで混乱し、あたふたしている。

「いくぜー、ベジタブル必殺の？流れ星？」

遠くからベジタブルが弓を天に向けて矢を放つと、流れ星のように矢が一直線に走り執事達を打ち抜いた。

「メ、メ～」

広範囲に執事のＨＰを削り、倒してゆく。

「おいしい所を持って行きやがったな」

「見た？　かっこいいだろ」

数匹になってからは楽勝で倒し、クロノ達は、ボスが待つ第三の城――ワンだ魔城に走った。

魔犬が闊歩している。舌をだらりと出していて、凶気を感じるが、執事程ではなかった。スピードはある。だが、クロノ達の敵ではない。

「執事のほうが強いぞ、バカ犬」クロノは斬りつける。

「だな」ベジタブルは矢を射る。

犬を蹴散らして、ボス部屋に到達した。

クロノ達が部屋の真ん中に立つと扉が閉まり、閉じ込められる。とたんに黒い霧が発生して視界を奪われる。霧散した場にはボスの狼男が立っていた。アニメや絵本で見る体躯が、がっちりとした狼男ではない。執事と同じようにすーっとしたラインの狼男だ。顔は人間と狼の融合。耳と牙と眼は狼そのものだ。

「ワオォォォォン」

第４話　狼男

狼男の重低音な咆哮で部屋全体が揺れている。
「あっ、ＭＰ回復するの忘れてた。危ね」
クロノは思い出し、具現化した水色の魔水を手に取って口に流し込む。全回復。
「来るぞ！」
ベジタブルの声を聞き、視線を狼男に戻す。最初に現れた所にはすでにいなかった。足音は聞こえる。この部屋に確かに居る。しかし、見回しても姿を見つけることができない。
「どこに……？」
「上だ！」
ベジタブルの叫びに反応して天井を見上げると、狼男はシャンデリアの上に乗り、こちらを睨んでいた。眼が合うと飛び下りて、両手を身体にピタっとつけて空気抵抗を少なくし、クロノを狙ってきた。
「！？」
直撃する直前に横へ跳び、回避することができた。が、狼男が着地すると勢いを殺さず横に跳び、噛みついてきた。ＨＰがイエロー一歩手前まで減少した。
「こいつ、強いぞ。気をつけろ」
「これでもくらえ、ジェットエンド」
狼男の側面からベジタブルは狙いを定めて弓を引いた。ロケット花火のように火薬が仕込まれた矢の後ろに導火線がついており、火をつけることで矢が途中でスピードを上げて赤い光の線を描きながら相手を射ぬく。速度は速いが、導線の火を顔の近くに持っていくため、ＨＰが微量に減ってしまう。
凄まじいスピードで狼男の脇腹を射ぬいた。
「ぎゅうぅん」

犬のように鳴いてクロノから離れる。ターゲットをベジタブルに変えて、体勢を斜めにして右腕を右斜め上にして爪でひっかこうと襲う。
クロノはベジタブルの前に立ち、両手剣でガードする。クロノはガードが崩れ、狼男は攻撃がガードされ、どちらも硬直した。先に攻撃体勢に入ったのはクロノのほうだった。
「トゥラスト・アクセラレイト！」
爆撃斬のような攻撃力があるやつより、速度を優先した技をぶつけた。最初の一歩に力を込めて地を蹴り、相手を突き刺す。狼男は地面に倒れた。
倒れている間に距離を離して次の攻撃に対応できるようにする。
狼男は立ち上がり、雄叫びをあげた。
「人間風情が調子に乗るな！！」
「こいつ喋るぞ。しかも低音イケメンボイス」
「生きて帰れると思うなよ人間。我が食してやる」
狼男の筋肉が膨れ上がり、スーツが裂けて裸になった。すっぽんぽんだが、毛は狼のようにあるので大事な所は見なくてすんだ。
ベジタブルは自分の世界に入っていた。
「いやー、よかった。我は合っているな。これで僕とか言われてみなよ？　イメージ崩壊だよ」
「そんなことどうでもいいから。構えろ、来るぞ」
「いやいや、これは大事なことなんだよクロノ。いい？　例えば、ポーカーロイドのディーラー、ミキさんが『アタイがカード配るよ』とか言ってみ？　絶対に人気でないだろ」
「いや、何を語ってんだ。今は戦闘中なんだが。そして、狼男来たんだけど！」
狼男はクロノをターゲットにして、力でねじ伏せていく。ガードをしても破れ、殴られ、噛みつかれの強襲。だが、やられているだけではない。クロノも両手剣を振りまわして、反撃に出た。
「おいおい、マジかよ」

斬られても御構いなしでクロノを攻撃してくる。ＨＰなんて気にしていない。攻撃あるのみだ。
クロノのＨＰはすぐにレッドまで減少。
「ほら見て、レッドになった」
クロノの言葉にも反応せず、ベジタブルはまだ自分の世界に浸っていた。
狼男は理性を失い、もう喋ろうともしない。ただ敵を駆逐するだけになってしまった。こんなに早く言葉を話さないのは初めてだった。沸点が低い魔族らしい。
「スイッチしてやる」
狼男の攻撃を回避して、走ってベジタブルの方向へ逃げた。ベジタブルより後ろに走ったおかげでクロノの認識が外れ、代わりにベジタブルを認識した。近い敵を認識するか、攻撃した者を認識するようになっている。
「――だから、そう言うわけなんだ」
ベジタブルが言い終えるまさにその時、狼男はベジタブルを上空に吹っ飛ばした。
「な、何で、吹っ飛んでんの！？　ていうか、狼男はいつのまに攻撃したんだ」
世界から帰って来たベジタブルは狼男の攻撃に気づいた。遅いが。
上空に打ち上げた獲物を追って、狼男はジャンプする。そして、身動きがとれないベジタブルより上にあがり、両手をがっちり合わせて背中に振り下ろした。今度は急降下して、ベジタブルは地面に叩きつけられる。それだけでは終わらずに攻撃を仕掛けてきたが、ベジタブルの方が早く動くことができ、最後の攻撃は受けることなく終わった。それでもＨＰのダメージは相当で、ベジタブルもレッドになる直前だ。
「やばい、死にそう。語らなければよかったよ」
反省してくれたのでクロノはよしとした。
敵に攻撃を仕掛ける。相手の速度より早い動作で繰り出せる〈ト

ウラスト・アクセレイト〉を使用した。倒れはしなかったが、硬直して隙ができたので敵の攻撃から避けることができる距離をとった。
狼男は両手を広げて鋭利な爪を光らせながらクロノに向かってきた。Ｘを描いて斬り裂いてきた。まさにその姿は、某有名な米ヒーロー、ウル〇リンだ。
しかし、クロノは避けることはせずに先程と同じ技を狼男にぶつけた。体から距離がある剣が勝った。攻撃がキャンセルされる。
ヒットエンドラン。即ち、逃げる。クロノは距離を置いた。
狼男の技は終了して普通の攻撃に戻った。しかし、それでも当ると危険に変わりはない。
「ひいいいいいっ。助けてー、ベジタブルマン！」
「僕、ベジタブル！　僕が来たからには、もう大丈夫だよ。お腹は空いていないかい？」
ベジタブルはクロノの遊びに乗ってくれた。
「野菜は要らないから敵を倒してよ！　ベジタブルマン！」
任せなさいと言い、攻撃した。
「ベージショット」
パンチで敵を空の彼方に飛ばすのではなく、矢を放ち射ぬく。しかも、言葉を発しているが、普通の基本攻撃だ。
平気な顔をして狼男は向かってくる。
「どうしよう、来るよ。ベジタブルマン！　もっと攻撃してよ」
「ベージショット！　ショット！　ショット！　ぶっば」
ベジタブルから変な音が出た。
狼男の攻撃をくらったせいでベジタブルのプレイヤーが叫んだのだ。
ベジタブルの攻撃のおかげもあり、敵のＨＰはもうレッドゾーンになりそうだった。
しかし、この戦いを終わらせてはくれない。狼男はトランスフォームして完全なるビーズトモードになった。それはもうデカイの何のって。

「象さんくらいデカイな」
「もう象さんだな」
「いや、それは違うと思う。狼だし」
声のトーンを落として、冷たく、残酷につっ込んだ。
「冗談はここまでにして片付けますか」
「そうしますか」
狼の城全体をも揺るがす咆哮を合図に二人は走り出した。左右に別れて挟み込むように向かい合い、攻撃をしようとした。だが、狼は尻尾を振り、ベジタブルを叩き倒す。
「どぅあぁぁぁぁ。スマーン」
「ベジタブルの敵！」
「まだ死んでないけどねー（星）」
クロノは剣を上から振り下ろして、左斜め下から斜め上に振りあげて、最後は横に水平に斬りつけた。
残りのＭＰを使い切って〈爆撃斬〉をした。
爆風と爆炎が狼を襲う。クロノは反動で動けない。爪でちょんとされるだけで壁まで吹き飛ばされた。
ＨＰとＭＰの回復を終えたベジタブルは弓を放った。
クロノは回復せずに再び走って立ち向かう。狼のＨＰがあと少しだということを知っているからだ。あとほんの少しくらわせると終わる。
「ジェットエンド！」
「ヴァァァァァウ」
ＨＰの色はないが、ギリギリ生きていた。狼はベジタブルに噛みついた。
口に咥えられ、ＨＰが継続的に減少していく。
後ろから剣を斬りつける。
「オラ！」
「％＄！＆＄％！％％＆％（、＆，」
悲鳴を叫び、狼は消えて逝った。

「やったあああああ」
「うおおおおおおお」
部屋の奥になる扉が開き、そこには攫われた女性の姿があった。

第5話　三人目（H）

女性に話しかけると2Dの画の窓が出現した。ムービーが流れる。
「助けてくれて、ありがとう。本当に……本当に怖かった、もう帰られないかと思うと怖かった。本当にありがとう」
女性は、体だけ映っている男性に話している。クロノ本人ではないが、クロノという設定で楽しめるようになっている。
「いえ、もう大丈夫ですよ。さぁ、帰りましょう」
「はい。……あの、お礼がしたいのですが……」
「ああ、気を使わなくても大丈夫ですよ。それより――」
「いえ、私がお礼をしたいのです。ほんのお礼ですので」
女性の唇が男の唇とごっつんこした。
「なんて大胆な人なんだ」
クロノのプレイヤーは目を見開いた。そして、前のめりになり、息を荒げた。
段々とマウスを握る力が強くなる。マウスさんがギィギィと鳴っている。
『もう強引なんだからご主人様……っぽ』と、言っているのかもしれない。
たぶんこのマウスはMなのだろう。締め付けられるのは嫌いじゃない、むしろ好き、ギィギィ。

【問題】
マウスさんのセリフを書いている時に思った、作者の気持ちは何でしょうか。作者の気持ちになって考えてください。

【答え】
ああ、なんてことだろう……。書いていて思ったが、マウスさんのセリフがニューカマーさんで再生される。こんなことがあっていいのか？　いやダメだ！　セリフを変える。
でした。

ちなみに変えたのが、これです。
『もう……強引なのねあなた。でも、そういうの好きよ。むしろもっと強くちょうだい』
無事、強気なお姉さんで再生されました。

作者タイム終了。

次、妄想タイム入りまーす。ＣＭの開け５秒前！　４、３、……。

〈妄想タイム〉
「け、けして面倒になったからとかじゃ……ないんだからな。勘違いするなよな！（ショタ風言い訳を添えて。料金はプライスレス）」

はい、本番いきまーす。

光を浴びて輝く白い海を泳ぎ、時間は掛ったが島の上陸に成功した。その島には、一つ大きな山が聳え立っていた。男のロマン、冒険心をそそられる。
山に登る前に島の周辺を歩いて探検した。
「そろそろ山に登るか」
探索を山に移して、それは頂きを目指した。一歩一歩確実に前に進み、しっかりと踏みしめて登っていく。何とか登りきることができた。向かいの方向にも同じ様な島があったが、今はここだけに集

中する。未知なる山の頂上を登ることに成功したそれは調査を開始した。
「それでは始めよう」
それは、手探りで探っていく。叩いてみたり、撫でてみたり、掘ってみたり、試行錯誤を繰り返していく。調査をしているうちにそれは大発見に繋がった。
「な、なんだ……。まさか……これは」
山の開いていた小さい穴から白濁の液体が湧きでてきた。次第には、温泉の源泉のように勢いよく噴出するように次から次へとあちこちから出てくる。
「母――」
ピ――――――――――。

セーフ。危なかったです。
ちょっと休憩しましょうか。何がいいですかね？
コーヒーにミル……いや、砂糖だけでいいですね。

……――

「では、帰りましょう」
ママさん女性の言葉を最後に、２Ｄの画面は消失した。

ド、ド、ドピュ×××～。
「ふー、テント撤収～！」
プレイヤーはテントを折りたたみ、包まった偉大なる万能紙をゴミ箱に放り投げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3434y/

エロゲオンライン

2011年11月22日03時13分発行